

局所進行膵癌でメタリックステントを留置後に、
温熱化学療法で長期治療が可能であった一症例

医療法人社団鶴田病院 ME 室 奥田みどり、中原祥吾、原田美砂子
岡崎優作、中村健二
看護部 岡村ゆかり
医局 川畑幸嗣、山口裕二、鶴田豊

【はじめに】今回、局所進行膵癌に対して、温熱療法を主体とする集学的治療と、局所温度測定により安全に副作用もなく、長期治療が可能であった症例を経験したので報告する

【治療経過】平成 24 年 11 月～当院で温熱化学療法開始。平成 26 年 8 月 胆道系酵素上昇、肝内胆管拡張にて胆道ドレナージ施行平成 27 年 1 月 ステント閉塞（腫瘍性狭窄）にてメタリックステント内にプラスチックステント留置。平成 27 年 5 月 CT 検査にて多発肝転移出現にて、HTx 治療終了する。

【結果】温熱化学療法を開始して約 2 年間は、CEA、CA19-9 の上昇は認めなかった。同薬剤を 2 年 6 ヶ月使用しており、温熱治療による薬剤耐性遅延効果が示唆された。メタリックステントを留置している症例に対して、局所温度測定により安全に副作用もなく温熱治療を継続できた。患者自身は治療に対して積極性はなかったが、温熱化学療法を中止こともなく、苦痛なく治療を継続する事ができた。

【まとめ】局所進行性膵癌という予後不良の疾患に対して、温熱化学療法での集学的治療を行ない、また局所温度測定により安全に副作用もなく、長期的に治療を継続する事ができた。